

## 年間第33主日

マルコ 13・24-32

2015. 11. 15

イエズス会司祭 柴田 潔

先週は、一年ぶりに福島にボランティアに行っていました。オーストラリアから帰ってすぐに行きたかったのですが、時間がなかなか取れませんでした。今回もCTVCカリタス原町ベースで宿泊したのですが、福島駅からベース・キャンプに向かうバスの中では、たくさんの除染作業員と無数のトン袋と言われる、除染した土を入れる袋が積まれているのを見ました。「どこまで除染できるんだろう？」いくらお金を掛けても、大自然のほんのわずかしかできないように感じました。今回した作業も、避難が解除されてから、戻るかどうかが決めかねているお宅の片付けでした。着の身着のまま避難してから何も手をつけてないお宅の、家の中だったり、樹木だったりの片付けでした。せっかくみんなでお手伝いしてきれいにしたのだから、「戻って欲しい」と思ってしまいますが、避難が解除されても戻る人は2割くらいだそうです。想像してみてください。昔住んでいたといっても、8割も人が減っているんです。同じ生活はできないでしょう。作業にお邪魔した方は、「自分たちは難民なんです。だから、戻らないと、心の整理、人生の整理ができないんです」と言われてました。作業のない日は、視察に連れて行ってもらいました。1年前、2年前、3年前より片付いてはきていますが、大槌のように新しい町ができていく印象はもてません。国道6号線は通ることができるようになったので、今まで行かなかった双葉町、富岡町も見ることができました。でも、横転した車や、解体されてない住宅がまだあったり……。4年8ヶ月経っても進まないことに気持ちが重くなりました。一年ぶりに行ったけど、気持ちが重くなるだけ。自分がしていることが役に立ってるのかさえわからなくなってくる。「次はいつ来てくれるんですか？」とベースの方に言われ、感謝はされているけれど腑に落ちてない気持ちで、戻ってきました。

今日の福音では、終末、世の終わりの苦難が朗読されています。原発事故で様変わりしてしまった人々の生活は、聖書にある苦難とつながります。なかなか光が見えてきません。これに対して、朗読の終わりには「天地は滅びるが、わたしの言葉は決して滅びない」とあります。わたしは、このみ言葉をどう受け止めたらいいいのか、説教をどうしたらいいか悩んでいました。昨日、四ツ谷のイグナチオ教会で“自死された方々のために捧げる追悼ミサ”がありました。説教の中で、幸田司教が「司祭は、架け橋です。神と人をつなぐ架け橋です」と話されていました。この言葉は、ずいぶん前に澤田神父さんが書かれた言葉

だそうです。わたしは、5年前に叙階された教会で、そのときのことも思い出しながら「司祭は、架け橋」と何度も心の中で繰り返しました。そのうちに、澤田神父さんが「司祭は、苦しむ方を神様の愛につなぐためにいるんだ」と語っているように感じました。このことを確信できたのは、聖体拝領の時です。司祭席から、隣に座っている澤田神父さん（東京教区の95歳の神父さんで、足が不自由になって杖を使いながら参加されていました）が、自分の席から大きなジェスチャーで祝福を与え続けています。自死された、ご遺族を思って精一杯の愛を、離れたところから届けようとしていました。「架け橋ってこういうことなんだ！」と直感しました。「何ができるとか、どんな効果があるとかじゃなくて、ありったけの思いを伝えようとする。それでいいんだ。それがすべてなんだ」と感じました。福島のことと言えば、どれだけ復興が進んでいるとか、ボランティアに行ったお宅が帰還するかしないかとか、それとは別の世界があることを感じました。ボランティア先のお宅もいつか取り壊されるでしょう。でも、精一杯注いだ行為は永遠に残るんだ。いっどこで何をしても、神様と人との橋渡しをしている。これが、わたしのアイデンティティだと教わりました。そう理解できたら、気が重いと感じた福島でのボランティアも、神様の祝福に満ちていたように捉えなおすことができました。澤田神父さんは、退堂のときも、立ち止まって祝福を与え続けていました。

今の話は、わたしの体験ですが、神様と人との架け橋になるのは、司祭だけではありません。ミサなどの秘蹟は司祭しかできませんが、日常生活では数限りなく、架け橋になるチャンスがあります。思いやりをもって話しかける、人の話を聴く。これだけでも大切な架け橋です。神様と人をつないでいます。澤田神父さんの与えた祝福をわたしたちも誰かにしていきましょう。これが「わたしの言葉は決して滅びない」ということではないでしょうか？ 神様の愛は永遠なのですから。